

## 寺院護持の論理と「兼職」

——浄土真宗本願寺派住職の語る世襲の近代——

一般社団法人ライフストーリー研究所 山本哲司

### 1 目的

この報告の目的は、伝統仏教における「寺院仏教」のひとつである浄土真宗本願寺派住職の語りから、寺院護持運営の困難と「兼職」にまつわるエピソードの分析を行い、変容する社会と寺院仏教の護持運営の課題を検討することにある。

### 2 方法

データとして、まず浄土真宗本願寺派全寺院を対象に行われた統計調査である『宗勢基本調査』（第9回2010年、第10回2015年）から、寺院運営の困難さの趨勢を概観する。宗勢基本調査では、護持運営について、年間の収入から寺務・法務担当、寺院運営の意思決定機関まで寺院の実態をうかがっている。この統計調査に引き続き行われた住職へのインタビュー調査では、寺院護持の困難のありようと、寺院をとりまく社会環境の変化、住職としての社会への見通しについてうかがってきた。ここでは、寺院の護持に直接かかわる問題でもあった「兼職」にまつわる語りの分析を行う。

### 3 結果

第9回宗勢基本調査によれば、住職全体における「兼職」経験の割合は60歳代までで約5割を占める。「世帯収入のほぼ全部が寺院収入」と答えた寺院は、全体の39.1%で、44.9%の寺院では、寺院外収入が寺院収入を上回る結果になっている。「寺院の活動で得られる収入で寺院を護持・運営できますか」という質問に、「護持・運営はきびしい」と「まったく護持・運営できない」を合わせた回答は51.6%にのぼる。（須羽新二 「第2章 寺院の人的基盤」『第9回宗勢基本調査』）。

インタビュー調査では、こうしたデータを背景に、住職たちが肌で感じてきた寺院の護持運営の困難さについてうかがっている。そこに見えてきたのは、地域社会そのものを代表するかのよう続いた伝統の衰退であり、家業のように世襲されてきた家族運営モデルの行き詰まりであり、宗教と経済の「摩訶不思議さ」をめぐるますますの語りにくさであり、それらの解きほぐしようのない複合的な困難であった。門徒衆を支える地域の経済・文化は衰退し、世襲の維持困難の葛藤は強まり、宗教的見解と金銭の関係はコストダウンと透明化が求められていく。

### 4 結論

インタビューにおいて（16寺院）、そうした寺院仏教の護持運営の複合的な困難さを示す代表的エピソードのひとつが「兼職」をめぐる語りであった。インタビューでは、「兼職」を経験する住職は、先代から兼職が行われている傾向があった。また、「兼職」は寺院の経済的な護持であるばかりではなく、ときには“住職に成る”までの準備期間を意味することもあった。寺院としての収入を上回ることもあっても、あくまでも「兼職」として意識する護持への姿勢は、住職として変容する社会に伝統的な寺院仏教の維持をはかる論理と宗教的立場との錯綜する矛盾を示していた。

### 文献

大村英昭、1996、『現代社会と宗教』、岩波書店

第9回宗勢基本調査実施センター、2011、『第9回宗勢基本調査報告書』、浄土真宗本願寺派宗務企画室

櫻井義秀・川又俊則（編）、2016、『人口減少社会と寺院—ソーシャル・キャピタルの視座から』、法蔵館